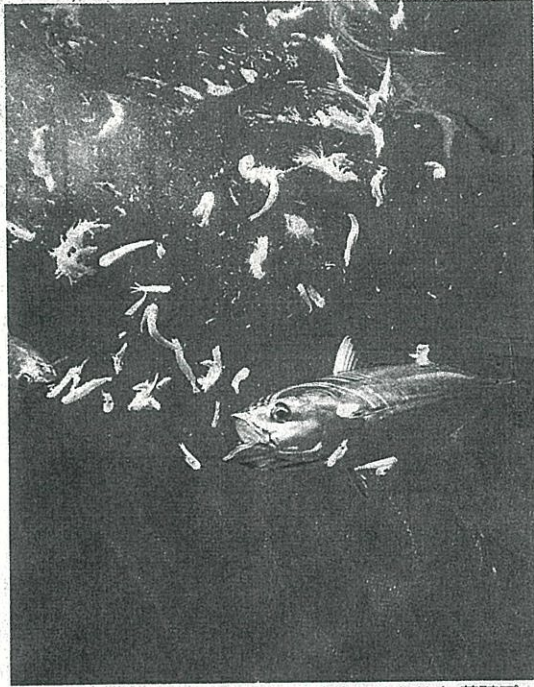


高知発 技術輸出に夢

「こんなこと考えるの高知県人ぐらいでしょう」

カツオ養殖に産学熱意

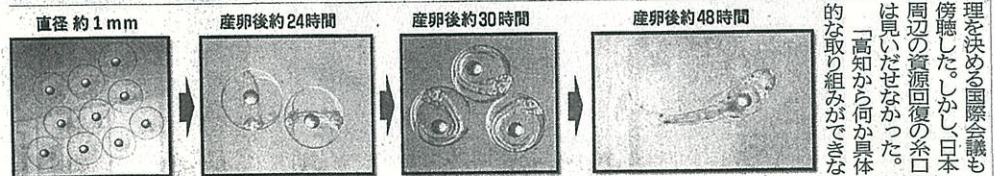


海上のいけすで飼われ、オキアミを食べるカツオ。養殖プロジェクトの発端となった（2019年12月、大月町古満目）

カツオの完全養殖に乗り出した高知の企業と大学。前例のない取り組みの先に描くのは、世界的な食料問題を見越した養殖技術の確立、そして高知発の技術輸出だという。「カツオベンチャー」の行方は――。

（1面参照）

プロジェクトのきっかけは2016年。産大大学院教授（59）の出会いを務めていた経歴も持った。大嶋教授の専門は病原微生物学や国際地域食料学。大手をきっかけて、世界の千頭邦夫社長（72）と、



理を決める国際会議も傍聴した。しかし、日本周辺の資源回復の糸口は見いだせなかった。「高知から何か具体的な取り組みができないか」。思索の末に、なごり着いたのが「高知に工業化したカツオ養殖」だった。

執念の36匹

「陸上養殖で極上のトロカツオをつくりたい」。千頭さんがそう語り始めた頃、周囲の反応は「養殖もんがうまいか」「採算が合うわけがない」。

カツオ県民会議会長を務める山崎道生・山崎技研会長（70）でさえ「やめちよや」。千頭さんは執念を見せる。19年夏、ボケットマネーをはたき、漁業者から1匹数万円の生きたカツオ36匹を調達。山崎技研の養殖いけす（薩多郡大月町）に投入した。

結果的に冬を越すことができなかったが、カツオはオキアミなどの餌を争うように食

べ、3カ月ほどで400g前後から1kg以上に成長した。カツオは飼えないという「都市伝説」千頭さんを尻目に、いけすを尻目に、いけすを泳ぐカツオ。この光景に関係者の士気が上がった。山崎会長も「そこまでするなら」と協力することに。大嶋教授は昨春、研究室でカツオの卵のふ化に成功。今後のプロジェクトの展開をこう描く。

陸上養殖を成功させるには、設備に使う素材や制御のためのIT技術など各分野の最先端を走る企業力が必要になる。こうした技術や素材は既にいっぱいあるけど、それがなかに生食の習慣がなかったサーモンは、養殖の普及で今や世界の主流企業で技術や資金情報、人材を提供する仕組みを整え、先端技術を集める。飼育にも、三県でサーモン

適した人工海水を作り、病気や汚染で魚が死なないよう水を徹底管理。価値の高い口の身質を、効率的かつ安定的に生産できるような餌の質や量も制御していく。

陸上養殖は、海の養殖業に比べて環境への負荷が少なく、近年カツオの消費に影響を与えているアサキスが寄生する心配もないという。

象徴の魚で

国連の推計では、現在約8億人の世界人口は2050年に97億人に膨らむ。食料需要が増え、必要な動物性タンパク質の不足も懸念される。

こうした事情を背景に、世界の養殖生産量は急激に増加。40年前に生食の習慣がなかったサーモンは、養殖の普及で今や世界の主流

陸上養殖の巨大プランが建設中だ。大嶋教授によると、同じ量の肉を作る際、魚類は牛や豚に比べて効率がいい。魚類の中でもキンザケやティラピアが高効率なのだという。

では、なぜカツオの養殖を？

千頭さんは「高知県民にとってカツオは文化的な価値がある。やつてみようじゃないか」と。こんなことを考える高知県人ぐらいではないかと笑いつつ、目は本気だ。

兵庫県出身の大嶋教授が付け加える。「高知人はカツオに対する思いがものすごい。そこが大事。難しいプロジェクトをビジネスで考えれば、採算だけで判断してしまう。高知の象徴であるカツオだからこそ取り組む意義があるんです」。

前代未聞のプロジェクトが、ふ化した稚魚のように大海原に泳ぎだした。（八田大輔）